

……ここ数年、夏の暑さは過酷を極め、もはや異常が日常化しつつあるのは周知のとおりである。産業革命に端を発する地球温暖化に関して、一九七〇年代後半にはすでに科学者たちによって警鐘が鳴らされていたはずだが、それからすでに半世紀が経過しようとしているにもかかわらず、人間たちは口では環境改善を叫びつつも、経済活動を優先させ、エネルギーを乱費し、森林伐採や不法投棄などの環境破壊を止めようとせず、母なる大地に多大な負荷をかけ続けてきたのだった。

深刻なのは全地球規模での気温上昇である。産業革命以降、地球の平均気温は一・五度ほど上がった。人間の感覚的にはわずかな上昇だが、地球環境を悪化させるには十分すぎた。極地の氷が解け続け、海流が変化し、海水温が上昇してオーストラリアの珊瑚礁が死滅し、シベリアの永久凍土が毎年のように失われてゆく。ヨーロッパを熱波が襲い、インドは超高温に見舞われて外出することもままならず、東南アジアでは集中豪雨による大規模な洪水が多発して都市が次々と水没し、アメリカ大陸では連続して発生したスーパーサイクロンが都市を襲って壊滅させ、アフリカでは干ばつに伴う飢餓が頻発して人々を餓死させてゆく。人類にとってはまことに厄災としかいえないが、ただ、原因が原因だけに、これは自業自得としかいえない惨状であって、天上の神々も飽き果てているに違いなかった。汝、行いを悔い改めよ――と警句されない時点で、もはや人類は神に見放されているのかもしれないが、それも仕方がないことであつた。

それにしても、夏は暑い。

本当に暑い。

世界がそうであるように、日本の夏の暑さも地獄のようであり、酷暑ならぬ酷暑が連日続くのだからたまらない。しかも湿度を伴っているのも、酷さにはより一層の拍車がかかるのだから嫌になる。

だが、いかに夏の暑さが酷くとも、生活するためには働かなくてはならないので、日本に暮らす人々は、毎日のように更新される最高気温の話題にうんざりしながらも、手足を動かして朦朧とする頭を回転させながら、昨日も今日もそして明日もいやいやながら労働に精をだす。空調が効いたオフィスで冷たいコーヒーを飲みながら優雅にデスクワークしている者たちがいる一方で、外ではスーツ姿の営業職が苦い顔で歩みを進め、作業服を着こんだ作業員が工事現場で汗を流し、運送配達員がふらふらになりながら荷物を運び、屋内でも介護職が卒倒しそうになりながら高齢者を風呂に入れている。

浴室の温度が四〇度を超えているにも関わらず、「寒い、寒い」と訴える入居者の要望を聞き入れて、冷房を入れることすらままならないのがこの職業の闇深さというものだろう。これで給料が安いものだからやってられない。せめて施設が暑さ対策でスポーツドリンクでも奢ってくれば、職員のやる気も国債の利回りくらいは上昇するであろうに、カネが無いといって経費をケチるのだから、職員の気持ちは職場から離れる一方であった。いずれ集団退職という名の反旗が翻されることになるだろうが、そんな事態が発生したとしても、無能なる上層部が我が身の振る舞いを悔いることはないだろう。

「やってらんねーぜ、こんな仕事！」

そう叫んで今年入ったばかりの新人職員が浴室の床に濡れたタオル

を投げつけて持ち場をばっくれたちようどその頃、関東圏内に位置するとある山の中を、一台の黒い車が走っていた。セダンタイプの黒塗りの高級車で、光沢を放つ異様な黒さがとても目立つ。その車内では、いかにも高価そうな革張りの後部座席に座る初老の男性が、運転を担う若い男性秘書に対して、内心の不安を吐露するように独白めいた語りかけている最中だった。

「それにしても、本当にこの道で合っているのかな？ 指定されたとおり、最後の信号機を曲がってから随分と走っているはずだが」

「は、はい、合っている、はずです……。じ、事前に何度も確認したので、間違いはないはずです、が……」

男性秘書の返事が弱いのは、彼も確信が持てなくなっていたからであらう。一応、道筋は何度も確認し、カーナビゲーションにも入力して万全を期しているはずだが、なにせ初めて訪れる場所であり、しかもこうも長く到着しないと不安になってくる。ただ、別に急いでいるわけではなかったのも、上司の男が部下を急かすようなことはしなかった。

「まあ、道が間違っていたら戻るだけのことだ。なあに、時間はたっぷりあるんだ。焦る必要はない。それよりも事故を起こしたら大変だから、安全運転を頼むぞ」

「は、はい。もちろんですよ、安野上さん。自分、こう見えて運転は得意なんで、その点は任せてください」

「それは頼もしい。頼むぞ」

車の後部座席に座る男——名を安野上一二三という初老の人物は、東京のとある大企業に勤めている男で、いま乗っている車の種類からもわかるように、社内での地位はかなり高い。そんな人間がわざわざ

こんな山奥を訪れている理由は、ヒートアイランド現象で高温化する都会を離れての避暑が目的ではなく、とある高名な霊能力者に会って仕事を依頼するためであった。

彼が会おうとしている相手は、名を姫野京子という若い女性の霊能力者である。これまでに数多くの心霊事件や怪奇現象を解決してきた実績があり、故人との対話によって失踪した女兒を発見したこともあったという。その腕を見込んで、重大な依頼をするために、彼はわざわざこんな山奥にやってきたのだった。

姫野京子が住宅兼事務所として住んでいるという場所は、関東圏内にあるとある山奥で、市街地から遠く離れた山間地にある。野生動物を見かけることも珍しくない場所で、昨今は熊が出没するとして行政が注意喚起したりもしている場所だ。一応、指定された信号機を右に曲がってそのまま走ればすぐに着くとのことだったが、すでに一〇分近く走っているのにまだ到着する様子がない。都会のすぐと、田舎のすぐでは、距離や時間の感覚が異なると言われているが、これはその典型かもしれない。

上司と部下という関係上、車内におけるふたりの会話はそれほど多く交わされなかったが、その沈黙を埋めるように、車内はラジオからは絶えずニュース報道が流れていた。円安が進んで一ドル一七〇円を突破したというニュース、イスラエルがトルコと交戦状態に陥って中東情勢が再び悪化しているというニュース、埼玉県の熊谷市で国内史上最高気温となる四十三度が確認されたというニュースが報じられた次は、連日、日本列島を不安に落とし入れている阿蘇山に関連したニュースだった。

『……それでは次のニュースです。熊本県にある阿蘇山で、放出さ

れるガスの量が依然として増加傾向にあることが確認されました。阿蘇山周辺では連日のように火山性地震が発生しており、気象庁は噴火警戒レベルを三から四に引き上げました。これに伴い熊本県は、阿蘇市在住の高齢者に自主避難を呼びかけることにし、県外への避難も検討するとのことでした……』

そのような報道が車内に流れると、運転をしている秘書の男が二三に対して口を開いた。

「昨日、ネットの動画サイトで見たんですが、なんでも、阿蘇山が噴火すると、日本どころか北半球が壊滅するみたいで、人類文明が崩壊するらしいですね。この話、一二三さんは知ご存じですか？」

「ああ、知っているよ。破局噴火ってやつだろう？ たしか九万年前にそれが起こって、九州にいた縄文人が絶滅したとか何とか」

阿蘇山が活動傾向に入ったことが報じられて以降、テレビやネットでは、阿蘇山が大噴火を起こすのではないかという話がまことしやかに語られるようになっていく。話題が話題ゆえ、視聴率や視聴回数が稼げるからであろうが、テレビ不況が深刻化しているこの現代において、阿蘇山噴火に関するドキュメンタリー番組が視聴率二十一パーセントという数値を叩きだしたそうだから、人々の関心の高さが伺える。どのチャンネルでも伝えていることだが、もし本当に阿蘇山が大噴火したとしたら、日本どころか全世界が大変なことになる。

「本当に噴火が起こるんでしょうか？」

「さあな。まあ、起こったとしても、それほど大きな噴火にはなるまい。それより前方注意だ。噴火より、目先の事故のほうが恐ろしいぞ」

「はい、わかっています」

結局、彼らが乗った車が目的の場所に到着したのは、最後の信号機

を右に曲がって二〇分が経過したときだった。森に溶け込むようにして建っているログハウスを見つけ、その近くに、「姫野霊能事務所」と書かれた看板を発見したのだ。どうやら無事、目的地に到着したようである。

「やれやれ、どうにか着いたな」

車から降りて硬直した身体を伸ばしながら、一二三はログハウスの玄関へと向かった。指が自然と呼び鈴に伸びる。だが、彼がチャイムを押すよりも早く内側からドアが開いた。

現れた女性を見て、一二三は一瞬、ドキッとした。中から出てきた女性が、とびっきりの美人だったからである。

「安野上さんですか？」

「あ、ええ、そうですが……」

「私、姫野京子と申します。お待ちしております。さあ、どうぞ中へお入りください。遠慮なさらずに」

応対したのは姫野京子本人だった。神秘的な雰囲気漂う美人で、芸能界のトップに君臨する女優やアイドルたちよりもはるかに綺麗な見た目をしており、すらりと背が高く、そして魅力的な身体をしていた。そう、大きいのだ。胸に実った張りのある弾力豊かな乳房が、形のよい安産型の極地というべきお尻が、とにかく大きくて大きくて目のやり場に困るほどの存在感を見せつけてくるのである。

両方ともあまりにも大きいため、身体の体型が白いブラウス越しにはっきりと判るほどであり、目のやり場に困ることこのうえない。後ろに控える部下の動揺が、背後から波導となっってはっきりと伝わってくるほどだ。

すでに初老の域に達しつつあるとはいえ、一二三も男であるから、

彼女のように顔も身体も魅力的な女性を目の当たりにすれば、動揺せずにはいられない。が、彼は若い部下と異なり、冴えない外見からは想像できないほどの修羅場を潜り抜けてきた男だったので、内心の驚きを顔には出さず、穏やかな口調で言ったのだった。

「では、失礼させていただきます」

そう言って、彼は姫野の住居兼事務所へと足を踏み入れたのだった。

*

一二三は通された客間にて、出されたお茶をひと口含んでから、目の前に座った姫野京子に対して丁寧な態度で頭を下げた。そして自己紹介をした。

「お初にお目にかかります。私、別子金属鉱山という会社で、専務取締役を務めている安野上一二三と申します。このたびは、高名な霊能力者として名高い姫野さんにお会いすることができて大変うれしのです」

自分の年齢の半分も生きていない相手に対して、かなりへりくだった口調での挨拶だったが、これができるところが彼の凄みであろう。

一二三の自己紹介を受け、京子は目に見えて驚いたようだった。

「別子金属鉱山って、あの、別子金属鉱山株式会社ですか？」

驚くのも無理はない。仕事に関する内容や依頼主の素性は会ってからとのことだったので、相手の素性を詳しく知らなかったのだ。この業界ではよくあることである。

一二三は余裕の表情でほほ笑んだ。

「はい、そうです。東証一部にも上場している、あの別子金属鉱です」

別子金属鉱山株式会社とは、旧財閥に端を発する国内最大の非鉄金属企業であり、その時価総額は軽く三兆円を超える。業務形態は鉱山開発と運営、金属精錬、加工、機能性素材の製錬と販売であり、金・銀・銅・プラチナ・ニッケル・亜鉛・鉛などを産出する鉱山を国内外に三〇か所も有している。観光地としても有名な国内最大の金鉱山も所有物だ。そんな大企業の専務ともなれば、その社会的地位は霊能力者などという胡散臭い職業とは比較にならないほど高く、本来であればまみえることがないほどの社会的な格差がある。しかし、一二三は地位を振りかざす姿勢はおくびにもださず、その態度は一介のサラリーマンと大差がなかった。相手に真価を悟られず、実力を隠すこの姿こそ、高卒でありながら大企業の専務にまで昇りつめた男の凄みであった。

一瞬、沈黙が流れた気がした。しかし、それは取るに足らないほど短い時間であり、やぶったのは京子のほうだった。

「それで、今日はどのようなご依頼でいらっしゃったのですか？ 詳細は会ってからとのことでしたが」

「ああ、そうでした。さっそく本題に入らせてもらいたいのですが、その前に、姫野さんは悲嘆村をご存じですか？」

「ええ、知っています。確か、九州地方にある村ですよ。いまは廃村になって久しいと聞いています。行ったことはありませんが」

京子は即答した。この業界——心霊現象や怪奇現象に関する事象を生業としている者で、悲嘆村について知らない者はいないだろう。最近では都市伝説関連のブログや動画で取り上げられたりもしているため、一般の人でも知っている者も多いと聞く。

悲嘆村は、かつて九州地方の山間に存在した小さな村で、かなり僻

地にありながらも、金の鉋脈が見つかったということで、江戸時代末期から昭和初期までそれなりに潤っていたという。しかし、金が採れなくなって鉋山が閉鎖されると、人口が流出して村は次第に廃れていき、全村移住が検討されるまでになったそうだ。

この状況に目をつけたのが国だった。国は移住先の確保と引き換えに村全体を国有地とすると、そこに収容所を建てた。その施設は、表向きは先天的な身心障がい者の収容施設ということだったが、実態は、集めた障がい者たちを使って非道な人体実験をおこなう場所だったそうだ。

当時、日本は朝鮮半島を足掛かりとして大陸に進出している最中だったが、屈強な日本兵も、異国の気候や風土、そして疫病にはかなわない。コレラ、赤痢、ペスト、破傷風など、戦闘以外の要因での死傷を避けるため、特効薬の開発が急務だった。そこでそれらの問題を解決すべく、障がい者たちを使ってさまざまな実験がおこなわれたのだという。

施設でどのような人体実験がおこなわれていたか、その内容は詳しく伝わっていない。しかし、おびただしい数の障がい者たちが犠牲になって、太平洋戦争が終わるまでに三〇〇〇人近い障がい者が非道な実験によって殺されたという。

戦後、施設は閉鎖され、研究資料も破棄されて、村は完全な廃墟と化してしまったが、廃村となった村には殺された障がい者たちの霊が化けて出るようになり、心霊現象が多発するようになった――だけでなく、村に迷い込んだ登山者や物見遊山の若者たちが障がい者の霊に襲われるという事例が相次いだのだ。確認されているだけでも一〇人を超える者が奇怪な死を遂げ、それと同じくらいの者が永遠に行方を

絶ち、発狂して救出された者も多いという。そして、辛うじて生還した者たちも、村で死んだ障がい者たちの泣き叫ぶ声や絶叫、苦悶の呻き声を聞いたといい、それが原因で村はいつしか「悲嘆村」と呼ばれるようになったというのだ。

「まあ、その話はほとんど悪質なデマなんですがね」

安野上一二三はあっさりと言つてのけた。

「で、デマ、ですか」

「はい。まあ、確かに、廃村にいたるまでの間に、なにかいろいろと「不幸な出来事」があったとは聞いておりますが、村には都市伝説で語られているような障がい者を収容する施設は建てられませんでしたし、人体実験どころか、国有地になった事実ありません。そもそも村の名前からして違いますしね。ただ――」

「ただ？」

「廃村になった村で起こったという怪事件――道に迷った登山者や物見遊山の若者たちが奇怪な死を遂げたり、行方不明になったり、発狂して見つかったという話、これは事実なんです」

そう言われても、京子は別に驚いたりはしなかった。たぶん、廃村になったあと、村になにかよくないモノが棲みついたのだろう。人が居なくなった場所が邪霊の棲み処になるのはよくあることだ。依頼者の口ぶりからして廃村にいたるまでになにかあったようだし、もしかしたら金と一緒に眠っていた「ナニカ」を掘り起こしてしまったのかもしれない。

「――もしかして今回のご依頼は、その怪現象の調査でしょうか？」
「さすが、鋭いですね。そうです、そのとおりです。今回、姫野さん
にお願いしたいことは、廃村となった村で生じている怪現象の調査と

原因の究明、そして可能であれば解決してもらいたいです。お願いできますでしょうか？」

やはり、と思い、京子は小さく頷いた。

「なるほど、お話はよくわかりました。ですが、なぜいまさら調査を？話を聞くかぎりでは、村に近づかなければ害がないようですから、そっとしておくのが吉だと思うのですが。触らぬ神に祟りなし、ともいいますし」

「ええ、たしかに、そのとおりです。ですが、どうにかしなければならぬ事態が発生しまして……」

「と、いいえますと？」

「件の悲嘆村ですが、正式名称は別子村といいまして、実は別子金属鉱山株式会社発祥の地でもあるんです。そして、最近、過去の文献を調査していたところ、閉山した鉱山には、かなり有望な金の鉱脈が複数あることがわかったんです」

その量、なんと推定七〇〇トン。国内最大どころか世界でも屈指の規模であり、昨今の金価格高騰を考えれば大企業でも狂喜せずにはいられない。会社はさっそく、鉱山技師や地質学者、洞窟探検家からなる十一人の調査隊を組織して向かわせたのだが、ここで大問題が発生した。

「村に派遣した十一人のうち、女性三人が行方不明、五人が発狂した状態で保護されて、残りは村へ通じる廃道の入り口付近で変死体となって発見されたのです」

発見された変死体はいずれも眼球を刳り貫かれており、内臓を喰われ、手もなくなっており、いずれも恐怖の形相で硬直していたそうだ。

この一件は会社の圧力によって「不幸な事故」として処理されたが、

原因が究明できなければ次の手が打てない。そこで、事態を打開するために白羽の矢が立ったのが姫野京子なのであった。

「あなたが霊能力視野として優れた力をお持ちしていることは存じております。あの「優衣奈ちゃん行方不明事件」が解決したのもあなたの尽力があったからとか。その力をどうかお借りできないでしょうか。お願いします」

そう言って一二三は頭を下げた。

そして、告げた。

報酬は、着手金で一千万円、原因究明で一億円、そしてもし事態が解決したら一〇億円を支払う、と。むろん、経費は別途だという。

この手の依頼としては破格の金額であり、提示された方は驚かずにはいられなかった。

「じゅ、一〇億円ですか。もの凄い金額ですね」

「それだけ我々も本気だということです。それに、金が採掘できれば、言い方は悪いですが、一〇億円などはした金ですからね」

仮に金の価格を一グラム、二万五〇〇〇円と過程した場合、一トンの価格は二五〇億円、七〇〇トンともなれば十七兆五〇〇〇億円にもなる。開発費を引いても莫大な利益は間違いなく、それに比べれば一〇億円など確かにはした金だ。

とはいえ、個人にとって一〇億円は大金であり、普段、京子が受け取っている報酬は、その二〇〇分の一以下が相場である。内容からして危険であるには違いないが、そもそも怪奇関連の依頼に危険が伴うのは当たり前なので、それが断る理由にはならない。それに、京子はその力に絶対の自信をもっていたので、かなりタチの悪い邪霊や土地神であったとしても調伏できると信じて疑わなかった。

だから――。

「わかりました、この依頼、受けさせていただきます」

そう言葉を発するに、躊躇いはなかった。いつさい。

かくして京子は九州の地へと赴くことになったわけだが、まさか、これが彼女にとって最後の事件になろうとは、この時はまだ、知る由もなかった。

*

……正式名称は別子村だが、都市伝説界限では悲嘆村の名で知られている廃村は、九州地方の僻地のさらに山奥にある。関東からそこへ行くためには、飛行機と電車とバスを乗り継いで、さらにタクシーまで使っても、まだ村の入り口にすらたどり着けない。村へ通じる山道は、かなり昔に廃道となっており、そこから先は車では進めないからだ。

京子に乗せたタクシーの運転手は、最初、彼女の乗車を心から喜んだようだった。客がとびっきりの美女だったからでもあるが、阿蘇山が活動期に入って以降、九州を訪れる観光客の数が激減しており、客を乗せるのが久しぶりだったからでもある。だが、京子に指定された目的地を知ると、場所が場所だけに、彼女を山奥で降ろすまでの間、一度ならず心配そうに声をかけてきたのだった。

「お客さん、あそこは人里から離れてて危ないですよ。それにいろいろとよくない噂も聞きますし、悪いことは言いませんから、戻ったほうがよくないですかねえ」

かけた声がどこか控え目だったのは、乗せた客からどこか拒絶的な

気配を感じたからかもしれない。

「ご心配にはおよびません。これも仕事ですので。それに、慣れていきますから」

「仕事、ですか……大変ですねえ」

京子の対応は柔らかかったが、言葉の奥に明確な拒絶の意思を感じ取った運転手は、もうそれ以上、彼女を引き留めようとはしなかった。

結局、タクシーの運転手は、京子を指定された場所で降ろすと、最後に身を案じる言葉をかけてもと来た道に戻っていった。

京子が降りた場所は、人里から遠く離れた山奥のど真ん中だった。悲嘆村へ通じる廃道がある入り口である。かつては整備され、大型の車両でも通行が可能であったろうその道は、廃道となってからかなりの時間が経過しているためか、ほとんど山と同化して荒れに荒れていた。

かつて道だった場所にはうつそうと草が生い茂り、折れた木や枝が道端にもたれかかっている。都市伝説によると物見遊山で訪れた若者たちは車でこの道を通ったとのことだが、それは昭和や平成初期頃の話であって、令和の時代には難しいと思われる。歩いていくしかない。

「まずは準備しましょうか」

彼女がいう準備とは、身支度を整え、覚悟を決めることを指す。京子は現在、季節に合った動きやすい服装をしているが、これは正装ではない。場所は野外であるが、京子は大胆にもいま着ているものを脱ぎはじめた。

ボタンを外し、チャックをおろす。服を脱ぎ、ズボンも脱ぐ。ついでにブラジャーも外した。瞬く間に豊満な裸体が露わになった。熟れた大きなスイカよりもはるかに大きな乳房が、白日の下に晒されて、

ぶるんと揺れた。

京子の乳房は、魔乳と称せるほど大きい。とにかく大きい。そのうえ弾力があって柔らかく、形もよくて張りがある。薄桃色の大きな乳輪が目立ち、ツンと尖った親指サイズの乳首が実にエロい。パンティーが派手に食い込んでいる安産型の大きなお尻も実に見事であるが、注目はやはり胸にいく。豊満という言葉は、まさに彼女のようなカラダを持つ女性にこそふさわしい言葉といえるだろう。

野外だというのに豊満な肉体を惜しげもなく晒してパンティー一枚だけという姿になった京子は、キャリーケースのなかから綺麗に折りたたまれた紅白の色彩を基調とした装束を取り出した。慣れた様子で袖を通す。そしてキュツと帯を締め、さらに靴から足袋へと履き替えた。

彼女が着替えた衣装は、巫女装束と修験装束を足して割ったような衣装であった。布地が肌に密着する作りとなっているためか、大きな乳房やむっちりとしたお尻など、身体の曲線が強調される仕様となっており、遠目からでも豊満な体型がはっきりと判る。胸元も大きく開いており、深い胸の谷間が実に見事だ。見方によっては卑猥といわれなくても仕方がない衣装であったが、着ている当人はそう思われても気にしないだろう。これは正装なのだ。危険な場所へ赴くさいに着る、いわば勝負服なのだ。

脱いだ衣類を詰めたキャリーケースを山道入り口の脇に隠し、必要最低限の荷物を持った京子は、鋭い表情で道の先を見た。

感じる、感じるのだ。

視線の先から漂ってくる異質な気配——悪意や害意を混ぜて煮詰めたような気配が、山の奥から流れてくるのだ。不吉な気配だ。心が弱

い者がこれを感じれば、肌が泡立ち、気分が悪くなるに違いない。

だが、これで怖気づくような京子ではない。邪悪な存在と対峙するとき、弱気や気弱は相手に付け入る隙を与えるだけにしかないことを彼女は知っているからだ。たとえどのような状況にあらうとも、不利を悟られることは愚劣の極みである。

「さあ、行くわよ」

自分に気合いを入れるよう声をだしたあと、京子は村へ向かって一歩を踏み出したのだった。

*

悲嘆村へと通じる道が、すでに「道」としての体を成していないことについてはすでに述べたとおりである。山道への入り口からしてほとんど山と同化しており、落ち葉が溜まり、うっそうと草が生い茂っているだけでなく、折れた木や枝が道端にもたれかかっている。数十年にわたって誰にも手入れされることなく時間だけが過ぎ去った感じの道が延々と続いているのだ。舗装された平坦な道であればあつという間に踏破できる道のりも、この惨状では鍛えあげたアスリートでもカタツムリのごとである。

しかし、靈力を高めるため、常日頃から山中での修行に励む京子にとってはそれほど苦な道のではない。彼女が人里離れた別荘地に居を構えているのは、別に人見知りとかではなくて、ちゃんと目的があることである。

荒れに荒れた廃道を、大きな乳房を揺らしながら、あるいは肉づきのよいお尻をむちむちと上下させながら、まるで平地を歩むがごとく

平然と歩き続ける京子。その表情は、何事もないかのように平静を保っているものの、その胸中では、夕立をもたらす黒雲のように、不穏なざわめきが刻一刻と大きくなりつつあるのだった。

感じる、感じるのだ。

廃村へと近づくにつれ、漂ってくる気配の不穏さと邪悪さが、歩みを進めるごとに強くなってくるのがわかるのだ。それは決して自分に向けられたものではなかったが、だからこそ、強い危機感を抱かずにはいられなかった。

感じる邪念は八方に放散されたものであるにもかかわらず、まるで特定の対象に向けられているかのように強かったからだ。

「なんておぞましい気配なの。こんなに強い邪念を感じるのは、はじめてだわ」

京子はまだ若いが、優れた霊能力者として、数々の修羅場を潜り抜けてきた。いまは亡き彼女の母親は、平成の時代に名を馳せた霊能力者であった。祓った悪霊や怨霊は数知れず、浄化した心霊スポットの数はゆうに三〇を超え、テレビにも出演して名を馳せた。その血を色濃く受け継ぐ京子もまた、優れた霊能力者であって、あの「優衣奈ちゃん行方不明事件」を筆頭に、数多の怪奇現象や心霊事件を解決した実績を持っている。そんな彼女が、まるで始めて戦場に投入される新兵のような緊張感をもっているのだから、向かう先が、相当——いや、かなり危険な場所であることはもはや疑いようのないことであった。

「……邪悪な気配がすごく強い。いったい、どれほど危険な存在が棲みついているのかしら」

京子がそう呟いたときだ。うつそうとした木々が、まるで緑のカ-

テンのようにパツと開けて、目の前に景色が広がった。古き日本の原風景を彷彿とさせる、自然豊かな田舎の景色が視界のなかに飛び込んできたのである。ひと目でわかった。目的の場所に到着したのだと。

「ここが悲嘆村ね」

かつて別子村の名を冠していた廃村は、周囲を深い山に囲まれた盆地に存在していた。眺望がすばらしく、山々が連なるその先に、薄っすらと煙が立ち昇っているのがみえた。位置からして、おそらく活発化しつつあるという阿蘇山の噴煙だろう。都会とは比較にならない自然の景色に圧倒されながら、京子は村全体を一望した。

村の大きさは、首を一八〇度ほど動かせば見渡せてしまうほどの広さしかなく、人が住まなくなつて朽ちた木造の廃墟が、中心地に群れを成すようにしてひと塊になつて集中している。これは一般的には集村形態と呼ばれている居住形態で、その周りには、かつて田畑であったろう場所が広がっているのだが、いまは草木が生い茂つていてもはや原野と大差がない。あと百年もすれば、すべてが自然に還つて人がいた痕跡など消えてしまふに違いない。

「あそこが村の中心ね。その近くには神社があつて、そして――」

ふと、京子の視線が一点に止まった。目を細め、遠くを見つめる。その先には、生い茂る自然に吞まれつつあるものの、まるで山肌に寄生するように整備された古いコンクリート製の建築物があつた。それがかつて火薬庫や貯鉱庫、それに事務所だった場所であり、その近くには濁った貯水池や幾つもの深い横穴が確認できた。おそらく、かつての鉱山跡地だった場所だろう。

京子はその一点に注目した理由は、いまいる場所からかなり距離があるにも関わらず、それを感じさせないほど不穏な気配が、目に見え

ぬ波動となつてひしひしと伝わってくるからであつた。

「……怪しい気配は村全体から感じられるけど、あの場所は特に強い。あの鉱山跡地に、なにか原因がありそうね」

時刻はまだ正午を過ぎた頃である。陽が沈むまでにはだいぶ時間がある。だが、急いては事を仕損じることわざがあるように、早やつて行動してもろくなことになる。着いて早々、なんの前準備もなく、もっとも危険な場所へ足を踏み入れるほど京子は愚かではなかつた。

「まずは全容の把握から始めましょうか。それで潜んでいるモノの正体に近づければ金、できなくても状況が把握できれば銀ってとこね。いずれにせよ、物事は慎重に進めないかね」

そう言つて京子は一步を踏み出した。木造の廃墟が建ち並ぶ村の中心に向かつて、ゆっくりと山肌を降りていった。

*

……村の端から一望したとき、村の中心は、かなり近い場所にあるように見えた。が、それは目の錯覚だったようで、実際に歩いてみるとかなりの距離があつた。

かつてたくさん村人たちが暮らしていたであろう廃墟群は、それなりに原型を保った建物が多くあつたものの、半ば朽ち、崩れ、家屋としての体を成していない建物のほうがはるかに多かつた。

全壊、半壊、健在など、すべて合わせた建物の総数は、たぶん、八〇は超えているであろう。ほとんどが住居で、かつて商店であつたろう建物には「ヒロポン錠入荷」という古びたチラシが張つてある。た

ったそれだけで、この村の時間が昭和で止まっているのだと理解できた。

そんな廃墟の中を、京子は大きな乳房をゆっさゆっさと揺らしながら歩きつつ、周囲を見渡して呟いた。

「まるで史跡ね。なんだかタイムスリップしたみたいだわ」

それだけ聞くと、呑気に観光している風にも聞こえるのだが、むろん、そんなはずがない。

感じる、感じるのだ。京子が建物の間を歩くつど、もはや立ち入ることも危険なほど荒れ果てた廃墟の中から放たれる、悪質な霊の気配を感じるのだ。おそらく、ほとんどの廃墟に邪な霊が潜んでいるのだろう。そして、薄暗い廃墟の中から、道を歩く京子の動向を伺っているに違いなかった――が、まだ昼間なので、出てきて襲ってくる感じはない。ただ、向けられている気配は確実に京子を狙っているソレであって、肌を刺す感触から、獲物の動向を伺う捕食者のソレに限りなく近いものがあった。

「ん？ あっ……！！」

ふと、京子は気づいた。自分の乳首が、装束の外側から見てもはっきりと判るほど、ピンツと鋭く勃っていることに。邪霊たちが放つ邪な波動に刺激され、自分の意思とは関係なく身体が反応してしまったようだ。

「やだっ、乳首が勃ってる。邪な気にあてられたせいね。このていどで感受的になるなんて、んっ、わたしもまだまだ修行が足りないみたいね」

胸の内側からもムラムラとした感じも湧きだしてきていたので、京子は、装束の内側にしなやかな動作で手を潜り込ませると、細い手で

自分の大きな乳房をぎゅっと掴んだ。それから、指に力を込めて乳肉に埋めると、そのまま大きな乳房を揉みしだきながら、ツンと尖った乳首を抓んでしごいた。

「んっ、くっ、あっ、んふうっ！」

胸の奥でくすんだ快感が爆発し、意思とは関係なく変な声が出た。乳房があまりにも大きすぎるため、たとえ片方の乳房だけであっても、片手だけで全体を揉みしだくことは困難を極める。だが、湧きあがるムラムラを解消できればそれでよかったので、京子は別に気にもしなかった。

「くうっ、んっ、あふう………っっ！」

押し殺すような変な声をだしながら、自分の乳房を強く揉みしだく京子。すでもう片方の手は股ぐらに伸びていて、柔らかな淫肉をくちゅくちゅと弄っている。

くちゅッ、くちゅくちゅッ、くちゅううううう………。

火で炙ったチーズのように熱い体液で満たされた自分のマンコの中に指を深く挿入しながら、中で動かし、膣壁を擦るように弄りまわす。ぐちゅぐちゅという音が響くつど、股間で快感が爆発し、顔が上気して自然と頬が紅くなる。気持ちいいが、不快の極みだ。

「んっ、くふうっ、あっ、まったく、変な気分させられて、んっ、嫌な感じだわ。でもこの様子だと、ここに潜んでいる霊たちは、んっ、悪質だけど、元凶じゃなさそうね」

おそらく、この場所に潜んでいる霊たちは、なにか理由があつてこの場に溜まっているのだろう。無害な霊もいるかもしれないが、この質からして、ほとんど悪霊や怨霊の類に違いない。村に迷い込んだ登山者や物見遊山の若者たちを襲ったのも、この場所に棲みついた彼ら

の仕業とみて間違いないだろう。

一般人が、なんの対策もないまま、無数の邪霊と対峙することは危険である。襲われたら最後、精神に異常をきたしたり、脳をやられて発狂したり、あるいは憑りつかれて自分を喪ってしまうことも珍しくない。軽い気持ちで心霊スポットを訪れた者たちが、筆舌に尽くしがたい悲惨な末路を辿ることはよく聞く話だ。

だが、生まれながらにして優れた霊能力を持っている京子は別だ。一般人と比べて霊的防御力は遥かに高いし、しかもそれを厳しい修行によって向上させている。ゆえに、邪霊たちに襲われても、そう簡単に心が壊れることはないのだが、ただ、感受性が高いため、霊たちに注目されることで「変な気分」にさせられてしまうことはよくあることなのである。そういった場合、後々、集中力を乱す要因にもなるため、さっさと発散しておくが吉なのであった。

「それにしても、んっ、なかなか、くうっ、治まらないわねえ……。」

邪気が、くうっ、少し強いみたい……。」

頬を少し赤らめながら、引き続き、自分の乳房や股ぐらを手指で慰め続ける京子。卑猥な音が木霊し響く。

ぎゅうっ、むぎゅむぎゅっ、ぎゅむむううううう……。

ぐちゅぐちゅっ、ぐちゅうっ、くちゅぐぢゅうううう……。

大きな乳房を強く揉みしだくと、身体が呼応するようにおっぱいの芯が硬くなり、勃起した乳首が敏感になってびくんびくんと痙攣している。股の内側もさらにあつく熱を帯びはじめ、淫肉がほぐれると同時にぐちゅぐちゅと激しく濡れはじめた。指を動かすつど、膣の中で発せられる卑猥な音がどんどんと強く大きくなってゆき、分泌される蜜淫液の濃度が高くなってというのがわかる。

「くううっ、んふうっ、くふうううう……！」

すでに何度か軽くイッてはいるのだが、身体はなかなか満足しない。いっそ、指ではなく、なにか異物を挿入したほうが早く解消できるかもしれないが、バイブもローターも持ち合わせがなかったので、乳房や性器を激しく撚るしかないのが齒がゆい。

「んっ、くうっ、あふうううっ。んんっ、もう、我ながらなにやっているのかしらねえ。んっ、野外でオナニーしてっ、くふうっ、い、イキまくるなんて……っ。んくうっ、これじゃわたし、んっ、変態みたいじゃない……っ」

確かに、事情を知らぬ者がこの様子を目撃したならば、コスプレした美女が野外オナニーを愉しんでいるようにしか見えないだろう。しかし幸いなことに、この村に自分以外の「生きた」人間はいないので、京子は発散に時間を費やすことができたのだった。

「あふっ、くふううっ、んっ、んんっ、くううううううっっっ！
い、イクっ、ああんっ、イッちゃうっ、んくううううう……！」

異性も同性も羨むような大きな乳房を強く揉みながら、ぐちゅぐちゅのマンコを派手に弄りまわしつつ、京子はこの村に関する情報を記憶の中でまさぐった。

この村にはかつて七〇〇人を超える村人たちが住んでいて、男性の大半が鉱夫として金の採掘に従事していたそうだ。そのことは、依頼主である別子金属鉱山株式会社から渡された資料に書いてあった。

その資料によると、金が採れなくなっただけで鉱山が閉じたあと、そこで働いていた労働者たちは集まって話し合い、資金を出し合っただけで会社を設立したのだそうだ。その後、佐藤商店という旧財閥系企業の支援を受けながら北海道で金の採掘に従事していたが、戦後は独立して鉱山

開発をするようになり、非鉄金属企業として成長していったそうだ。高度経済成長期という時代の追い風もあって、別子金属鉱山株式会社は国内でも屈指の大企業に成ったのだという。

「んんっ、でも、金が採れなくなったってだけで、んくううつ、そんな簡単に故郷を棄てれるものなのかしら」

資料によると、北海道で金の採掘事業をはじめたさい、村人たちはこぞって北海道へ移住したという。それこそ、生まれたばかりの赤ん坊から死にかけの老人にいたるまで、男女を問わず、村人たち全員が、暖かな南の地を棄てて、極寒の北の大地へと向かったというのだ。これはかなり異常なことであろう。

ふと、京子は思った。この村の人たちが故郷を棄てたのは、産業として金が採れなくなったからだというが、本当にそれだけが理由だろうか。主要な産業が衰退しても、別の産業を見出して存続した村は日本中にいくらかもある。それに、新たに判ったという金の鉱脈も、古い文献を調べて判ったというではないか。だとすれば、わざわざ鉱山を閉めなくてもよかったはずである。

「……もしかしたら、んっ、やっぱり、なにかなにかよくないモノを解き放ってしまったのかもしれないわね、んっ、くふうんっ」

確証はないが、ありえない話ではない。ビルや道路の工事中、古代の遺物を壊してしまって、そこに封印されていた邪悪な存在を解放してしまうことは、頻繁にはないが結構ある話だからだ。

「だとすれば、いったいナニを解放してしまったのかしら……」

考えているうちに頭が冴えてきて、胸の奥で渦巻いていたムラムラが無くなっていった。身体の疼きもおさまり、精神の火照りも消えたようなので、京子は乳房から手を離し、股ぐらを搔き混ぜる指も止めた。

それから、自分の愛液で濡れた手をウェットティッシュで拭きながら、京子は静かに呟いた。

「もうすぐ陽が沈む。まずは夜に備えることにしましょうか」

自分がオナニーしている姿を派手に目撃されたのだ。この夜、ここに潜む邪霊たちが、自分を襲ってくるという確信が彼女にはあった。

………続きは本編でお愉しみてください。